BUDŌ NEWS

今月のニュース

令和６年武道振興大会

盛山文部科学大臣（右）と握手を交わす高村会長

令和6年武道振興大会

盛山正仁文部科学大臣（右）と高木陽介武道議員連盟副会長・理事長

学校武道に外部指導者を

武道振興の要望を盛り込んだ決議文を盛山文部科学大臣に手渡す

丹羽秀樹
武道議員連盟理事・事務局長

川端達夫
日本武道館理事長

高村正彦
日本武道館会長

江渡聡徳
武道議員連盟会長

５年ぶりに開催された懇親会で乾杯の発声を行う川端理事長（壇上）

令和６年武道振興大会が武道議員連盟、日本武道協議会、日本武道館の３団体共催により３月６日、東京千代田区永田町の衆議院第一議員会館で国会議員・武道関係者約216名が出席して開催された。大会では、学校武道で外部指導者を活用するなど武道振興発展のための７事項を盛り込んだ大会決議が採択され、高木陽介武道議員連盟副会長・理事長から盛山正仁文部科学大臣に手渡された。盛山文科相の祝辞と各武道団体の代表者が挨拶を行い、５年ぶりの懇親会が行われた。

丹羽秀樹武道議員連盟理事・事務局長の開会宣言で始まり、主催３団体を代表して江渡聡徳武道議員連盟会長が「いよいよ社会はポストコロナを迎え、本大会も盛大に開催されました。私たちの目的は『国家百年の計』です。社会をよくすると同時に武道を通じて立派な人材を育てて世界に誇れる国をつくることです。武道議員連盟は武道関係の皆さまとともに、日々努力を重ねてまいります」と挨拶を行い、続いて高村正彦日本武道協議会・日本武道館会長が「武道必修化によって武道振興の仏の形ができました。これからはその仏に魂を入れなければなりません。魂を入れるということは武道の真髄に触れるということです。そのためには武道家が教員とともに武道授業を行う形を作らねばなりません。部活動にも武道家が入らなければなりません。それらが実現すれば、魂が入るのです。令和は魂を入れる時代です。武道関係者が一体となって努力をしていきましょう」と挨拶を述べた。

次に高木武道議員連盟副会長・理事長が大会決議を読み上げると満場の拍手をもって採択され、盛山文科相にしっかりと手交された。続いて、盛山文科相が「武道は歴史と伝統に培われた世界に誇る日本文化です。今日、武道が広く親しまれていることは武道関係者の皆さまの努力の賜物（たまもの）です。文部科学省でも学校で多様な武道種目の実施を支援するなど、武道のより一層の振興を図ってまいります。引き続きご協力をお願いします」と祝辞を述べ、岸田文雄内閣総理大臣の祝辞文を司会の吉川

英夫日本武道館常任理事・事務局長が代読した。

９道武道団体の代表者が挨拶に立ち、現在の活動状況と今後の抱負を述べた。

挨拶後は川端達夫日本武道協議会・日本武道館理事長が「この場で長らく懇親会ができませんでした。交流の場が持てることをありがたいと思っております。それぞれの項目が実現するようそれぞれの立場で行動し、より武道が発展するよう祈念します」と述べて乾杯の発声を高々に上げた。５年ぶりの懇親会では、各道関係者はコロナ禍で苦楽を共にした同志らと和やかに歓談し、明日の武道振興へ弾みをつけた。

最後は武道議員連盟の高村正大事務局次長が閉会宣言を行い、大会は大盛況のうちに終了した。

高村正大武道議員連盟事務局次長（右）と宗昂馬少林寺拳法連盟会長（中）

江渡会長（右）と番匠幸一郎全日本銃剣道連盟会長

▼文部科学省 盛山正仁大臣が武道界へメッセージ

盛山文部科学大臣に武道団体に向けてメッセージをいただいた。

「ただいま決議文をいただきました。この決議を少しでも具現化できるよう、文部科学省として精いっぱい・力いっぱい努力をさせていただきます」

決　議

我が国は、明治維新以来、驚異的な勢いで国力を増し、世界有数の経済大国となった。しかし、昨今は国際情勢が厳しさを増し、価値観の多様化も相俟って、行動規範や善悪の基準が揺らぎ、明るい国家、社会の将来を見通すことは難しくなっている。

このような中にあって、武技による心身の鍛錬を通じて人格を磨き、識見を高め、有為の人物を育成することを目的とする武道は、旺盛な活力と清新な気風の源泉として日本人の人格形成に少なからざる役割を果たしてきた。

我が国伝統の武道の普及奨励は、精神を高揚し、質実剛健の気風を育成するばかりでなく、国家・社会の発展に寄与し、広く世界の平和と福祉に貢献する人物を生み出すために必要不可欠である。これは、教育基本法に示される「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」という目的とも合致する。

よって、我々は武道のさらなる振興発展が図られるよう、ここに左記事項の早期実現を強く要望する。

記

一　必修化された中学校武道授業に関し、学習指導要領に並列明記された武道全九種目が幅広く実施されるよう、外部指導者を活用した複数種目実施のモデル事業を全国各ブロックで継続して行うこと。そのために必要な措置を講ずること。

二　中学校武道授業が充実、成功するよう、施設、用具、指導者の条件整備をより一層推進すること。

特に、指導者については、教員養成大学で武道を必修化し、中学校教員採用試験に武道を試験科目として位置付けるとともに、武道有段者の学生を積極採用するよう各都道府県教育委員会に働きかけを行うこと。さらに、充実した授業が実施できるよう優れた外部指導者を各中学校に配置し、処遇改善を図って、指導に万全を期すること

内閣総理大臣祝辞

「令和６年　武道振興大会」の御盛会を心よりお慶び申し上げます。

武道は、心・技・体を一体として鍛え、人格を磨き、道徳心を高め、礼節を尊重する態度を養う、人間形成の道であり、世界に誇る日本の伝統文化です。

予測困難な時代を生き抜き、新しい時代を切り拓く原動力となるのは「人間の力」です。日本の未来を担うこどもたちが武道を通じて、人間形成を図り、「人間の力」を高めることは、現在のみならず将来においても、重要な意味を持つと確信しています。国においては、全国の中学校で武道を必修とする中、武道の推進校を指定し、学校における武道の教育の一層充実に取り組んでいます。

今日、武道は、日本のみならず、広く世界の人々に愛され、親しまれています。今後とも、より多くの皆様の心身の健全な発達のため、そして武道を通じた日本理解や国際親善のため、お力添えをいただきますようお願い申し上げます。

本日御参加の皆様の御健勝と、武道のますますの御発展を祈念し、私のお祝いの言葉といたします。

令和６年３月６日

内閣総理大臣　岸田文雄

と。また、全国一万余校の中学校体育教員を対象とした武道指導者講習会を、関係武道団体の協力を得て、実施すること。授業に当たっては、時間数を増やし、複数種目の実施校拡大を図り、武道ならではの教育効果が上がる「礼」を重視した指導を徹底すること。これに関わる武道九種目の指導者研修会や指導法研究、指導書作成等、関係団体の諸活動に必要な支援、助成を行うこと。

三　将来の小学校における武道授業の実施へ向け、実践校における実践研究をより積極的に展開し、発達段階に応じた武道九種目の指導法研究を行い、準備を推進すること。

四　武道の国際的普及振興のため、国内外における武道の国際大会や国際交流事業をより一層推進するとともに、海外日本人学校における武道授業の内容充実に向け、必要な支援、助成を行うこと。

五　全国的な武道の普及振興をより確かなものとするため、全国都道府県立武道館協議会の活動に対する支援と、各都道府県武道協議会の設置促進に必要な支援を行うこと。

六　武道の源流である一千数百年の歴史を有する古武道の保存・継承を図るため、伝統流派の活動の成果を認め、文化財保護法に、我が国が世界に誇る「古武道」の名称を明記し、全国各地の古武道の文化財指定が推進されるよう所要の措置を講ずるとともに、文化庁長官表彰の授与など必要な支援、助成を行うこと。

七　武道場の整備については、武道授業を含め、国の補助制度を拡充するとともに、必要な支援、助成を図ること。全国の武道館及び町道場については、維持存続のため、修繕・新築に関する助成金の支出、賃料・地代の援助、相続税・固定資産税の減免措置を講ずること。

以上、武道議員連盟・日本武道協議会・日本武道館三者によって共催する武道振興大会の名において決議する。

令和六年三月六日

各道代表者の挨拶とインタビュー

本項では、9武道の代表者の挨拶を掲載します。また、各団体代表者に「中学校部活動・クラブ活動の地域移行について」各団体の現状と課題・展望を伺いました。

中里壮也
全日本柔道連盟副会長兼専務理事

網代忠宏
全日本剣道連盟会長

加藤出
全日本弓道連盟会長

南和文
日本相撲連盟会長

笹川堯
全日本空手道連盟会長

植芝守央
合気会理事長

宗昂馬
少林寺拳法連盟会長

久保素子
全日本なぎなた連盟会長

番匠幸一郎
全日本銃剣道連盟会長

■代表者挨拶

◎全日本柔道連盟・中里壮也副会長兼専務理事

「今年はパリ五輪が行われます。14階級で代表者が内定しました。また、令和6年度は新たに発達障がいの方に向けた普及振興に取り組んでまいります」

◎全日本剣道連盟・網代忠宏会長

「コロナで生き抜く術（すべ）を習得し、昨年は事業を完全実施しました。今年は、7月に第19回世界剣道選手権大会をイタリア・ミラノで開催します。18回大会がコロナ禍で中止となりましたので国際大会をできることに喜びを感じております」

◎全日本弓道連盟・加藤出会長

「今年2月に第4回世界弓道大会が名古屋市で開催されました。大会は大成功を収め、日本の2チームが優勝・準優勝に輝きました。弓道の課題は社会人になるとやめてしまう人が多いことです。なかなか戻ってきません。年齢ギャップを埋められるよう努めてまいります」

◎日本相撲連盟・南和文会長

「昨年は世界大会を東京で盛会に開催しました。相撲が世界に普及するにつれ、日本人、特に女子が勝てなくなりました。これは外国で相撲が男女とも普及したことによります。日本ではまだまだ女子の普及が広がっておらず、一層の努力をしてまいります」

◎全日本空手道連盟・笹川堯会長

「昨年は家庭の中に空手が入るよう、ゆるゆる大会やガチンコ大会などを行いユーチューブで発信しました。また、特別支援学校で多くの空手道授業実施の要望をいただいてお

ります。電話一本で職員が全国どこでもお伺いします」

◎合気会・植芝守央理事長

「今年は8年ぶりに第14回国際合気道大会を代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで、85カ国の代表者と2千名の会員を集めて開催いたします。これからもしっかりと合気道の普及に努めます」

◎少林寺拳法連盟・宗昂馬会長

「昨年は世界大会を6年ぶりに開催できました。今年の大きな目標は公益法人化です。新たな時代に新しい拳士を増やしていくこと、社会に求められる少林寺拳法にするべく努力していきます。拳と心を鍛えながら未来に歩を進めてまいります」

◎全日本なぎなた連盟・久保素子会長

「今年はアメリカで第8回世界なぎなた選手権大会が開催されます。日本選手団は世界に向けて凛(りん)としたなぎなたを発信できるよう精進します。先の令和6年能登半島地震において、なぎなた関係者も甚大な被害を受けました。こうした困難な局面において、なぎなたは思いやりを重んじる武道の心を通して復興に寄与してまいります」

◎全日本銃剣道連盟・番匠幸一郎会長

「銃剣道は昨年・今年と全ての活動を再開できました。本連盟は以下の二つを重視しております。一つは国際化です。近年では銃剣道に興味を持つ欧州・アジアの方が増えてきました。令和6年度中に国際連盟の設立を目指します。もう一つは、女性とジュニアに対する振興です。銃剣道はジェンダーに関係なく健康増進・護身術ができる武道です」

◇

■インタビュー〈中学校部活動・クラブ活動の地域移行について〉

◎全日本柔道連盟・中里壮也副会長兼専務理事

「いくつか方策があります。一つは拠点校を定めて、そこで合同部活動を行う。もう一つは地域の核となる高校や大学に集まって実施する。それから地域のスポーツクラブの活用です。そして市区町村などの柔道連盟が主体となって行うものです。さまざまな形態がありますので地域にあった形で実施いただければと思います。課題は中学校から柔道を始める生徒をどのように繋(つな)ぎ止めるかです」

◎全日本剣道連盟・網代忠宏会長

「市区町村教育委員会と地域の剣道連盟のコンタクトが上手(うま)くいってない状況です。進んでいる地域もありますが、まだまだ進んでいないのが現状です。教育委員会との連携を深めていければと思います。地域の指導者の研修などをやっていく必要があると思います」

◎全日本弓道連盟・加藤出会長

「実施している県が多少あると伺っています。地域でクラブ活動を行うことで、やがて地域の指導者が育ち、社会人の弓道人口減少に歯止めがかかればと思います」

◎日本相撲連盟・南和文会長

「どんどんと推進しております。地域移行に向けての講習会も開きました。講習会を行い、共通理解を広めて深めることが大切です。各地域の相撲経験者の活用が鍵となります」

◎全日本空手道連盟・笹川堯会長

「文部科学省や日本体育協会支援のもと中学校の教員に向けて講習会を行っています。教員が空手を理解しないと安心して実施できないと思います。空手道は伝統を守りつつも安心・安全なスポーツとして盛んに実施していただきたいと思います」

◎合気会・植芝守央理事長

「部活動として合気道を取り入れている中学校・高校はまだまだ少なく、地域クラブ活動に移行する段階ではないのが現状です。まずは、合気道を学校教育の中でできるようにしていくことだと思います」

◎少林寺拳法連盟・宗昂馬会長

「学校側の要望と指導者側の理解が噛(か)み合う環境をつくることが急務です。兵庫県や岡山県などは実施校があります。指導者のコーチング力を鍛えていかねばなりません」

◎全日本なぎなた連盟・久保素子会長

「進捗(しんちょく)状況に地域差があります。香川県の琴平町では、地域に移行しているところもあります。課題としては、指導者不足や金銭面などがあります。一歩一歩進めていかなくてはならないと思っています」

◎全日本銃剣道連盟・番匠幸一郎会長

「都道府県連盟に要望を伺って、実施希望がある地域は全面的に協力するような体制をとっております。駐屯地などでは銃剣道が盛んに行われています。そのような場所を拠点として実施できたらと思います」

町道場の整備支援を要望

令和６年武道議員連盟総会

武道振興施策について説明する茂里スポーツ庁次長（左側の起立者）

令和６年武道議員連盟総会は３月６日、武道振興大会に先立ち、衆議院第一議員会館国際会議室で開かれた。大会には同連盟に所属する国会議員64名（代理出席を含む）、日本武道館役員、スポーツ庁幹部が出席し、同連盟の事務局報告、スポーツ庁の武道振興施策、日本武道協議会と日本武道館の現場報告、質疑応答が行われた。

丹羽秀樹武道議員連盟理事・事務局長の司会のもと、初めに武道議員連盟の江渡聡徳会長が挨拶を行った。続いて武道議員連盟名誉顧問の高村正彦日本武道館会長が挨拶を行い会議に入った。

総会では丹羽理事・事務局長から事務局報告として、議員連盟役員案と令和５年の会計報告、決議案が諮られ、全会一致で承認された。

続いて茂里毅文部科学省スポーツ庁次長が武道振興施策について説明した。

⑴学校における武道指導の充実について

「令和の日本型学校体育構築支援事業として多様な武道等指導の充実と支援体制を強化している。多様な武道指導は、令和元年度から多様な武道種目に触れる中学校を『武道推進モデル校』に指定して実践研究を行っている。令和５年度は132校で実施した。６年度についてもしっかりと実施していきたい」

⑵運動部活動改革について

「学校部活動については地域連携や地域移行を進めている。大きな課題として少子化の進展によって学校単位での部活動の実施が困難となったことや教員が顧問を務めることが難しくなっていることが指摘されている。将来にわたって子どもたちがスポーツに親しめるような受け皿を確保していくことが大事。また、子どもたちのみならず地域住民にとってもより良いスポーツの環境整備が必要である。改革にあたっては、ガイドラインに従って、令和５年度から３年間を改革推進期間と定め、地域の実情に応じて早期実現を目指していく」

⑶武道場の整備について

「５年度の補正予算額と６年度予算

額の合算で約50億円を計上した」

(4)武道ツーリズムについて

「武道ツーリズムをスポーツツーリズムの重要テーマと位置付けて、支援を行い、武道を含めたスポーツツーリズムの認知拡大を促進する」

次に2月20日に行われた武道議員連盟・スポーツ庁・日本武道館3者懇談会での質問に対する回答がスポーツ庁の茂里氏から述べられた。

江渡聡徳
武道議員連盟会長

小山展弘衆議院議員

遠藤利明衆議院議員

質問に応じる茂里スポーツ庁次長（右）

Q．コロナ禍の対応について

A．「各団体からの聞き取りによると大会や講習会の延期や中止、昇段審査の回数を減らしたのが実態です。そういった中で講習会をリモートで行ったり、ビデオによる審査などさまざまな工夫を持って苦難を乗り越えたと伺ってます。スポーツ庁としては、このような事例を感染対策を踏まえた指導資料として動画にまとめていこうと思います」

◇

次に日本武道館の永嶋信哉振興部長が令和5年度の日本武道協議会加盟団体の活動状況として①主要全日本大会開催状況②主な事業③古武道保存事業④武道国際交流事業について説明。次に令和6年度の主な事業として、全日本少年少女武道錬成大会（7～8月、8種目・計9日間）、ベトナム社会主義共和国派遣日本武道代表団（11月）、外国人留学生等対象国際武道文化セミナー（3月）の三つの国庫補助対象事業ついて同部長から説明があった。

◇

最後に質疑応答に移った。質問と回答は以下の通り。

Q1．江渡聡徳武道議員連盟会長

「全国の武道場は老朽化が進んでいます。スポーツ庁には、武道館のみならず、町武道場の整備をお願いしたい」

A1．茂里スポーツ庁次長

「民間施設の補助については、現在制度はございません。どのような形で町道場を支援できるか、議論しながら進めたいと思います」

Q2．小山展弘氏（衆議院議員）

「弓道の遠的場は市に一つもないことも多々あります。ぜひとも整備を進めていただきたい」

Q3．遠藤利明氏（衆議院議員）

「スポーツ基本法の制定時に武道をどう捉えるのか結論がでなかった。時代とともにさまざまな課題が生まれてくる中、今後は同法を改正しなければなりません。スポーツの中で武道をどう扱えばいいのか教えていただきたい」

※二つの質門については回答は持ち越され、会は終了した。

武道議員連盟役員名簿　（敬称略）

名誉顧問	高村　正彦（前自民党副総裁）	川端　達夫（元衆議院議員）	
顧　　問	麻生　太郎（自民）	衛藤征士郎（自民）	海江田万里（無所属）
	中曽根弘文（自民）		
会　　長	江渡　聡徳（自民）		
副会長	逢沢　一郎（自民）	有村　治子（自民）	今村　雅弘（自民）
	遠藤　利明（自民）	塩谷　　立（自民）	下村　博文（自民）
	高木　陽介（公明）	古川　元久（国民）	森　　英介（自民）
	山谷えり子（自民）		
理事長	高木　陽介（公明）		
理　　事	遠藤　　敬（維新）	逢坂　誠二（立憲）	熊田　裕通（自民）
	笹川　博義（自民）	田名部匡代（立憲）	長島　昭久（自民）
	丹羽　秀樹（自民）	福岡　資麿（自民）	松本　剛明（自民）
事務局長	丹羽　秀樹（自民）		
事務局次長	高村　正大（自民）	滝沢　　求（自民）	

令和６年３月６日現在

◎日本武道館の単行本

剣道の文化誌　明治大学教授　長尾　進　著

四六判・上製・480頁・定価2,640円

本書では剣道の持つ文化としての多様な面を、時代を追いながら、わかりやすく紹介する。剣道を愛好する方には剣道を改めて見直すきっかけとして、剣道をあまりご存知ない方には剣道という日本文化の成り立ちを知るガイドとして、ぜひご一読を。

剣道　その歴史と技法　埼玉大学名誉教授　大保木輝雄　著

四六判・上製・516頁・定価2,640円

本書は戦国末期から江戸時代初期を起点に、今日に至るまでの剣道の歴史的発展の経緯を示した。戦国期以前の剣術の有り様を認識した上で改めて各時代の流れに沿った剣道史を考えてみたいという筆者の思いを実現すべく、連載終了後５年のときを経てついに単行本化。

合気道　その歴史と技法　合気道道主　植芝守央　著

四六判・上製・362頁・定価2,640円

世界140の国と地域、国内2,400の道場・団体で愛好される合気道。開祖・植芝盛平翁の生涯、植芝吉祥丸二代道主による普及・振興、さらなる発展に繋げた現道主による取り組み。その歴史の中で培われ伝え続けてこられた合気道の理念、それを体現する稽古法、基本的な技法の解説……合気道の全てを網羅した決定版。

空手道　その歴史と技法　小山正辰・和田光二・嘉手苅徹　著

四六判・上製・548頁・定価2640円

空手は沖縄で発祥し、日本本土に伝承され、今や世界のKARATEとなった。その歴史と技法を、那覇系剛柔流の小山正辰氏、首里系松濤館の和田光二氏、沖縄空手研究の第一人者である嘉手苅徹氏の共同執筆で重層的に紐解く。嘉手苅氏が発見した剛柔流の開祖・宮城長順の最新の事実、小山・和田の両世界チャンピオンのエピソードなども満載。空手の真髄に迫る白眉の一冊。

マンガ・日本武道風土記（上・下巻）　漫画家・別府大学客員教授　田代しんたろう　著

B５判・248頁・定価1100円

全国の「武道ゆかりの地」を実際に訪ねて、ペンとスケッチブックを片手に徹底取材。地元関係者や施設の学芸員とのやりとり、その土地の成り立ちをわかりやすくマンガで紹介。多数の資料をもとに丹念に描いた当時の風景も魅力の一つ。マンガの世界で日本各地をめぐってみては。

死ぬまで弓道　弓道教士七段　小牧佳世　著

四六判・上製・342頁・定価2640円

競技中に急性大動脈解離に倒れた筆者は奇跡的な生還を果たす。その８カ月後に弓道を再開し、わずか２年後に皇后盃で十射皆中、優勝を果たした。本書では激動の自伝を記し、弓のあり方や「早気」など弓道家の誰もが陥る課題などを模索する。死の淵を覗き、現在も全身全霊で弓を引き続ける筆者だからこそ記せた弓道伝記かつエッセイ

学校武道の歴史を辿る　筑波大学名誉教授　藤堂良明　著

四六判・上製・354頁・定価2640円

明治維新を迎え、武術は衰退したが、近代化の過程で武道が「人間形成の道」として学校制度の中に組み込まれ、発展した。太平洋戦争後に武道は全面禁止となるが、それを乗り越え、「格技」として復活。平成24年度には「中学校武道必修化」が実現した。学校武道の歴史を丹念に辿り、今後のあり方を探る。

ご注文・お問い合わせ

（公財）日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321　東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147　FAX 03-3216-5158
https://www.nipponbudokan.or.jp

●スポーツ庁　資料

令和の日本型学校体育構築支援事業
③多様な武道等指導の充実及び支援体制の強化

令和6年度予算額（案）：195,500千円
（前 年 度 予 算 額　　：195,500千円）

背　景

令和３年度から全面実施した学習指導要領において、武道の種目は、柔道、剣道、相撲、空手道、なぎなた、弓道、合気道、少林寺拳法、銃剣道を示し、我が国固有の伝統文化により一層触れることとしており、保健体育授業における武道等の指導の一層の充実を図るためには、全国的に質の高い授業の実践、教員等の指導力向上が必要である。

事　業　概　要

我が国固有の伝統文化である武道等の指導の充実を図るため、中学校の保健体育における多様な武道種目の実施や外部指導者の活用などの実践研究を行うとともに、武道関係団体による多様な武道指導実践への支援体制の強化を図る取組を行う。

多様な武道等指導の充実

都道府県・指定都市教育委員会に委託（4,300千円×35箇所）

多様な武道種目に触れる保健体育の授業や外部指導者の活用などを行う中学校を「武道推進モデル校」に指定した実践研究を行うとともに、多様な武道種目の指導法講習会など教員の指導力向上を図る取組等の実施

支 援 体 制 の 強 化

法人格を有する団体に委託（5,000千円×９団体）

武道関係団体による外部指導者の養成講習会や指導ガイドブックの資料の作成など指導力向上を行うことで、中学校における多様な武道種目の実践の支援体制を強化するための取組等の実施

学校における部活動改革の必要性

【部活動の意義】
○　生徒のスポーツ・文化芸術に親しむ機会を確保。
○　生徒の自主的・主体的な参加による活動を通じ、責任感・連帯感を涵養。生徒同士や生徒と教師等との好ましい人間関係の構築。

【部活動の課題】
○　少子化の進展により、従前と同様の学校単位での体制での運営は困難。学校や地域によっては存続が厳しい。
○　必ずしも専門性や意思に関わらず教師が顧問を務める指導体制の継続は、学校の働き方改革が進む中、より困難。

■　少子化が進む中でも、将来にわたり生徒がスポーツ・文化芸術活動に継続して親しむ機会を確保。

■　「地域の子供たちは、地域で育てる」という意識の下、地域のスポーツ・文化資源を最大限活用。生徒のニーズに応じた多様で豊かな活動を実現。

■　生徒のみならず、地域住民にとってもより良いスポーツ・文化芸術の環境整備。スポーツ・文化芸術による「まちづくり」。

●スポーツ庁　資料

令和４年12月

学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン【概要】

スポーツ庁　文化庁

○ 少子化が進む中、将来にわたり生徒が**スポーツ・文化芸術活動に継続して親しむことができる機会を確保**するため、**速やかに部活動改革に取り組む必要**。その際、生徒の自主的で多様な学びの場であった部活動の**教育的意義を継承・発展**させ、**新しい価値が創出**されるようにすることが重要。
○ 令和４年夏に取りまとめられた部活動の地域移行に関する検討会議の提言を踏まえ、**平成30年に策定した「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」及び「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を統合した上で全面的に改定**。これにより、学校部活動の適正な運営や効率的・効果的な活動の在り方とともに、**新たな地域クラブ活動を整備するために必要な対応について、国の考え方を提示**。
○ 部活動の地域移行に当たっては、**「地域の子供たちは、学校を含めた地域で育てる。」**という意識の下、生徒の望ましい成長を保障できるよう、**地域の持続可能で多様な環境を一体的に整備**。地域の実情に応じ生徒の**スポーツ・文化芸術活動の最適化を図り、体験格差を解消**することが重要。

※Ⅰは**中学生**を主な対象とし、**高校生**も原則適用。Ⅱ～Ⅳは**公立中学校の生徒**を主な対象とし、高校や私学は実情に応じて取り組むことが望ましい。

Ⅰ　学校部活動

教育課程外の活動である学校部活動について、実施する場合の適正な運営等の在り方を、従来のガイドラインの内容を踏まえつつ示す。

（主な内容）
- **教師の部活動への関与**について、法令等に基づき**業務改善や勤務管理**
- **部活動指導員**や外部指導者を確保
- 心身の健康管理・事故防止の徹底、体罰・ハラスメントの根絶の徹底
- **週当たり２日以上の休養日**の設定（平日１日、週末１日）
- 部活動に強制的に加入させることがないようにする
- 地方公共団体等は、スポーツ・文化芸術団体との連携や保護者等の協力の下、**学校と地域が協働・融合した形での環境整備**を進める

Ⅱ　新たな地域クラブ活動

学校部活動の維持が困難となる前に、学校と地域との連携・協働により生徒の活動の場として整備すべき新たな地域クラブ活動の在り方を示す。

（主な内容）
- 地域クラブ活動の運営団体・実施主体の整備充実
- **地域スポーツ・文化振興担当部署や学校担当部署、関係団体、学校等の関係者を集めた協議会**などの体制の整備
- 指導者資格等による質の高い指導者の確保と、**都道府県等による人材バンクの整備、意欲ある教師等の円滑な兼職兼業**
- 競技志向の活動だけでなく、**複数の運動種目・文化芸術分野など、生徒の志向等に適したプログラム**の確保
- 休日のみ活動をする場合も、原則として**１日の休養日を設定**
- 公共施設を地域クラブ活動で使用する際の負担軽減・円滑な利用促進
- **困窮家庭への支援**

Ⅲ　学校部活動の地域連携や地域クラブ活動への移行に向けた環境整備

新たなスポーツ・文化芸術環境の整備に当たり、多くの関係者が連携・協働して段階的・計画的に取り組むため、その進め方等について示す。

（主な内容）
- **まずは休日**における地域の環境の整備を着実に推進
- **平日の環境整備はできるところから**取り組み、休日の取組の進捗状況等を検証し、更なる改革を推進
- ①市区町村が運営団体となる体制や、②地域の多様な運営団体が取り組む体制など、**段階的な体制の整備**を進める
  ※地域クラブ活動が困難な場合、合同部活動の導入や、部活動指導員等により機会を確保
- **令和５年度から令和７年度までの３年間を改革推進期間**として地域連携・地域移行に取り組みつつ、地域の実情に応じて**可能な限り早期の実現を目指す**
- 都道府県及び市区町村は、方針・取組内容・スケジュール等を周知

Ⅳ　大会等の在り方の見直し

学校部活動の参加者だけでなく、地域クラブ活動の参加者のニーズ等に応じた大会等の運営の在り方を示す。

（主な内容）
- 大会参加資格を、**地域クラブ活動の会員等も参加できるよう見直し**
  ※日本中体連は令和５年度から大会への参加を承認、その着実な実施
- できるだけ**教師が引率しない体制の整備**、運営に係る適正な人員確保
- **全国大会の在り方の見直し**（開催回数の精選、複数の活動を経験したい生徒等のニーズに対応した機会を設ける等）

地域スポーツクラブ活動体制整備事業等

令和6年度予算額（案）　2,738,192千円
（前年度予算額　2,470,899千円）
令和５年度補正予算額　1,431,951千円

スポーツ庁

方向性・目指す姿

- ✓ **地域の実情に応じた持続可能で多様なスポーツ環境を整備**し、**多様な体験機会を確保**。
- ✓ **少子化の中でも、将来にわたり我が国の子供たちがスポーツに継続して親しむことができる機会を確保**。学校の**働き方改革**を推進し、**学校教育の質も向上**。
- ✓ **自己実現**、**活力ある社会と絆の強い社会創り**。**部活動の意義の継承・発展、新しい価値の創出**。

- ✓ **子供や大人、高齢者や障害者の参加・交流を推進する地域スポーツ活動の中に部活動を取り込む。ウェルビーイングの実現、まちづくりの推進。**
- ✓ **「地域の子供たちは、学校を含めた地域で育てる。」という意識の下、地域の実情に応じスポーツ活動の最適化**を図り、**体験格差を解消。**

事業内容

Ⅰ.地域クラブ活動への移行に向けた実証事業　10億円（10億円）　14億円［令和５年度補正予算額］　委託・拡充

各都道府県・市区町村の地域スポーツの推進体制等の下で、**コーディネーターの配置を含む運営団体・実施主体等の体制整備**、**指導者の確保**、**参加費用負担への支援**等に関する**実証事業を実施**し、国において事業成果の普及に努めるとともに、全国的な取組を推進する。

（１）地域クラブ活動への移行に向けた実証 ※取組例

体制整備
- 関係団体・市区町村等との連絡調整
- コーディネーターの配置、地域学校協働活動推進員等との連携の在り方
- 運営団体・実施主体の体制整備や質の確保

指導者の質の保障・量の確保
- 人材の発掘・マッチング・配置
- 研修、資格取得促進
- 平日・休日の一貫指導
- ICTの有効活用

関係団体・分野との連携強化
- スポーツ協会、競技団体、大学、企業等
- スポーツ推進委員、地域おこし協力隊
- まちづくり・地域公共交通

面的・広域的な取組
- 地域クラブ活動の拡大
- 市区町村等を超えた取組

内容の充実
- 複数種目、シーズン制
- 体験型キャンプ
- レクリエーション的活動

参加費用負担支援等
- 困窮世帯の支援
- 費用負担の在り方

学校施設の活用等
- 効果的な活用や管理方法

※　実証事業２年目となる地域クラブ活動は、原則、国費だけではなく、一定の割合の受益者負担や行政・関係団体の自主財源からの支出、企業等からの寄付などとの組み合わせにより、持続的に活動することを前提とした仕組みを構築し、検証。
※　平日・休日の一貫指導や市区町村を超えた取組など、地域の実情に応じた最適化・体験格差の解消を図る意欲的な取組を充実。

★　重点地域における政策課題への対応
地域スポーツ環境の整備に先導的に取り組む地域を**重点地域として指定**し、**政策課題への対応を推進**する。

<主な政策課題>
- ・多様なスポーツ体験の機会の提供
- ・高校との連携やジュニアからシニアまでの多世代での取組
- ・スクールバスの活用や地域公共交通との連携
- ・不登校や障害のある子供たちの地域の学びの場としての役割
- ・トレーナーの活用を含めた安全確保の体制づくり
- ・企業版ふるさと納税等を含む民間資金の活用
- ・体育・スポーツ系の大学生、パラアスリート等を含むアスリート人材等の活用
- ・学校体育施設の拠点化や社会体育施設との一体化などによる地域スポーツの活動拠点づくり
- ・動画コンテンツ等の活用
- ・多様なニーズに対応した大会の開催　等

（２）課題の整理・検証、地域クラブ活動のモデル・プロセスの分析、地域クラブ活動の整備促進等
- 事業成果の普及方策、地域クラブ活動の整備の進展に伴う新たな課題の整理・解決策の検討
- 運営形態の類型や競技などの地域クラブ活動のモデル・プロセス、組織マネジメント等の分析・検証
- 単一自治体での対応が困難な場合の地域クラブ活動の整備促進方策の検討　等

※1　補助割合について、都道府県又は指定都市の場合は、国1/3、都道府県・指定都市2/3。
※2　コミュニティ・スクール（学校運営協議会）等の仕組みも活用。

Ⅱ.中学校における部活動指導員の配置支援　15億円（12億円）　補助・拡充

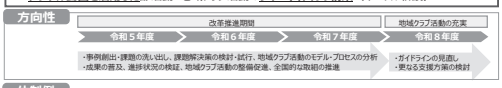
各学校や拠点校に部活動指導員を配置し、教師に代わる指導や大会引率を担うことにより、生徒のニーズを踏まえた充実した活動とする。（補助割合：国1/3、都道府県1/3、市区町村1/3）※1

➡ **部活動指導員の配置を充実**【13,000人】

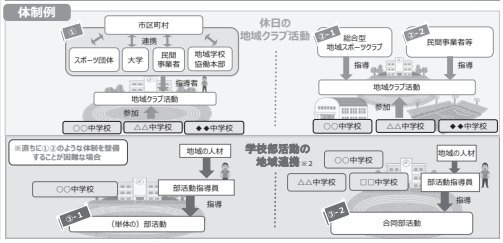
Ⅲ.地域における新たなスポーツ環境の構築等　3億円（3億円）　補助・委託

上記の施策を支える**新たなスポーツ環境の構築等**のため、以下の取組を実施。
- ・公立中学校の**施設の整備・改修を支援**(用具保管の倉庫設置、スマートロック設置に伴う扉の改修等)
- ・**指導者養成**のための講習会や**暴力等の根絶**に向けた啓発活動の実施等。
- ・**大学生が卒業後も継続的に**地域の中学生の**指導に当たる仕組みを構築**。
- ・**デジタル動画を活用した**部活動・地域クラブ活動の**サポート体制の構築**（ポータル新設）

方向性



体制例



＊　本資料における「スポーツ」には障害者スポーツを、「中学校」には特別支援学校中学部等を含む。
体制例は、あくまでも一例である。

（担当：スポーツ庁地域スポーツ課）

●スポーツ庁　資料

体育・スポーツ施設整備
（学校施設環境改善交付金等）

令和６年度予算額（案）　：3,228,456千円
（前年度予算額　：3,600,000千円）
令和５年度補正予算額　：1,590,516千円
（令和4年度第2次補正予算額：　815,546千円）

スポーツ庁

事業開始年度　平成23年度～

▶ 自治体が整備する体育・スポーツ施設に対して学校施設環境改善交付金を交付することにより、以下を推進する。
- 地域のスポーツ環境の充実
- 2050年カーボンニュートラル達成に向けて、脱炭素社会の実現に寄与する環境整備
- 災害時には避難所として活用されるための環境整備（耐震化及び空調設備の整備等）

スポーツをする場の確保

- 学校のプール、武道場の新改築等
- 地域の拠点となる運動場、体育館、プール、武道場等の新改築等

※改築：既存の施設を全部取り壊し、更地にしてから同様の施設を造る工事

国土強靭化の推進

避難場所の活用

- 地域のスポーツ施設の耐震化（構造体・非構造体）
- スポーツ施設の空調整備

脱炭素社会の推進

- 地域のスポーツ施設に再生可能エネルギーを整備
- CO_2排出減に寄与する整備を支援

補助対象　地方公共団体

算定割合　1/３補助　※災害対応の浄水プール等は**1/2**

R6制度改正
- 社会体育施設の空調設備（新設）について、補助率を**1/2**に引上げ（令和７年度までの時限的措置）

事業開始年度　令和５年度～

▶ 地域スポーツクラブ活動で必要な用具の保管のための用具庫等、運動部活動の地域スポーツクラブ活動への移行に資する施設について、整備・改修（32億円の内5,000万円）を支援する。

補助対象　地方公共団体　｜　補助対象となる学校種　公立中学校　｜　算定割合　1/３補助

効果
- ✓ 災害に強く、災害時にも快適に過ごせるスポーツ施設を整備することで、災害に強いまちづくりに繋がる。
- ✓ 環境にやさしい地域のスポーツ施設を増やし、脱炭素社会の実現に貢献する。
- ✓ 地域スポーツクラブ活動に必要な整備・改修を支援することで、地域のスポーツ環境整備を促進する。

担当：スポーツ庁参事官（地域振興担当）付

スポーツによる地域活性化・まちづくりコンテンツ創出等総合推進事業

令和6年度予算額（案）　178,800千円
（前年度予算額　190,534千円）

スポーツ庁

現状・課題

交流人口の拡大に寄与する**スポーツツーリズム**については、その普及・実践を推進し、各地で萌芽が見えつつあるが、新型コロナウイルスの影響によるインバウンドの消失等により、国内在住外国人や、国内の観光客を主な対象にシフトし、**実施・効果検証**を行ってきたところである。

インバウンドの回復を踏まえ、訪日外国人をターゲットとした**取組事例の創出**、**DXを活用**したプロモーション等による**スポーツツーリズム・ムーブメントの創出**や、インバウントニーズの高い武道を含めたスポーツツーリズムの**認知拡大による地方誘客**及び、地方において本格的な体験ができるコンテンツ創出を、**全国的なムーブメントとして促進**する必要がある。

事業内容

事業実施期間　平成２９年度～

スポーツと地域資源を融合させた**「スポーツツーリズム」**等を通じ、交流人口の拡大、地域・経済の活性化を推進するため**高付加価値コンテンツの創出に向けた取組をモデル的に支援**するほか、インバウンドの回復を踏まえた**スポーツツーリズム・ムーブメント創出を積極的に推進**する。

①スポーツツーリズムコンテンツ創出事業　0.8億円

○**重点テーマの「武道**（デジタル技術の活用を含む）」、「**アウトドアスポーツ**」を含めたテーマ別に地域スポーツ資源を活用した実証モデルの**実施、効果検証等を行う**。

（取組事例）国内外旅行者から選ばれる優良コンテンツを創出。**地域の魅力向上や消費額拡大、地方部での長期滞在※に資する取組**

※ワーケーション、検定や資格の取得、コンディショニング等

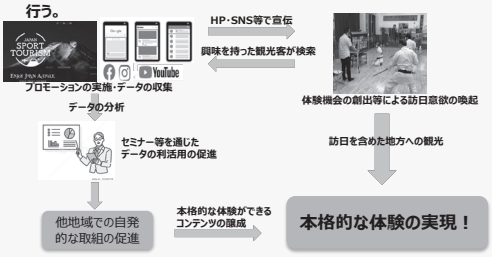
1.武道ツーリズム
（デジタル技術の活用を含む）
日本発祥の武道と歴史・文化等を融合させた稀少性の高い体験コンテンツを創出

2.アウトドアツーリズム
「スノースポーツ」、「登山・ハイキング・トレッキング」、「ウォーキング」など、景観や自然環境、地域の生活等を有機的に連携させた、広域コンテンツを創出

②スポーツツーリズム・ムーブメント創出事業（拡充）　0.9億円

○ホームページ等を通じ**デジタル技術を活用**した**プロモーションを実施**し、基礎的**データの収集・分析**、セミナー等を通じた、**データ利活用、他地域での自発的な取組を促進**。

○人口集積地やオンラインでの**体験機会の創出による武道を中心とした**スポーツツーリズムの認知拡大を通じ、訪日意欲の喚起、**地方誘客の促進を行う。**



スポーツによる地方創生・まちづくりへ

担当：スポーツ庁参事官（地域振興担当）付

優勝＝日本Ａ（左から、久野弥花選手、小越智就選手、木川寿眞選手）

日本が団体３連覇達成

日本勢同士の決勝、皆中で日本Ａが優勝

第４回世界弓道大会 －The 4th World Kyudo Taikai（Aichi・Nagoya）－

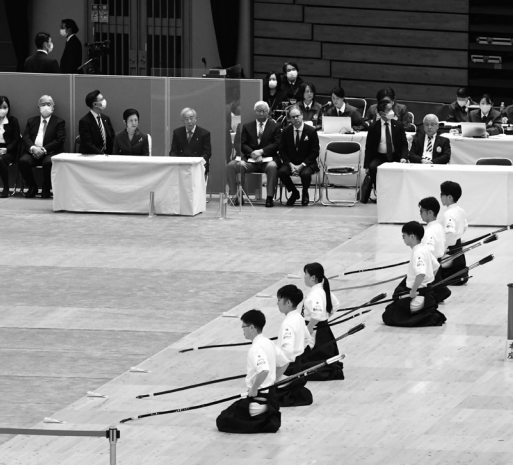
第４回世界弓道大会（主催＝国際弓道連盟、共催＝全日本弓道連盟、愛知県、名古屋市）が２月29日、愛知県名古屋市の日本ガイシホールで開催された。

大会は国際弓道連盟加盟団体による団体戦のみで行われ、前回大会より５カ国上回る25カ国・地域から36チーム、総勢157名が参加した。

決勝は日本Ａ・Ｂチームによる日本勢同士の対決となり、日本Ａが12射皆中で堂々の優勝。日本としては３連覇を達成し、弓道発祥の国としての矜持（きょうじ）を示した。

世界大会は４年に一度の開催だが、新型コロナウイルス感染症の影響で延期が続き、６年ぶりの開催となった。

会場となった日本ガイシホール



大会には国際弓道連盟名誉総裁の高円宮妃久子殿下が終日ご臨席した

準優勝＝日本Ｂ（左から、西田友樹選手、久野研太選手、池下大翔選手）

矢渡　加藤出範士八段

特別演武　薩摩日置流腰矢指矢

開会式に先立ち、特別演武として薩摩日置流腰矢指矢の演武が行われた。鎧（よろい）をまとった実戦さながらの伝統的な技法に、観客は興味深く見入った。

開会式では、加藤出国際弓道連盟会長が主催者挨拶を述べた。

「第4回世界弓道大会を開催するに当たり、世界各地域から多数の弓友の皆様にご参加をいただき、心から感謝申し上げます。本日は日頃の修練の成果を存分に発揮していただき、競技を伸び伸びと楽しんでください。そして、この機会にぜひ世界各国の弓道家との交流を通じて見識を深め、国際親善の一助となることを期待いたします」

続く矢渡でも、加藤会長が射手を務めた。

◇　◇

試合は3人順立で、予選ラウンドは各チーム12射（各4射）を2回行い、的中上位16チームが決勝ラウンドに進出（同中の場合は、順位が決するまで1本競射を行う）。決勝ラウンドはトーナメント戦で争われ、各チーム12射（各4射）を1回行い、勝敗を決した（同中の場合は、予選と同様に1本競射を行う）。

◆予選ラウンド

予選ラウンド1回目は各チーム一桁台前半の的中数が続く中、日本はAチーム10中、Bチーム12射皆中と圧倒的な力を見せつける。続いてドイツ（第2回大会3位）が10中、フランス（第1回大会優勝）Bチームが8中と強豪国が的中を重ねる。

2回目も日本は安定した的中を見せ、Aチーム合計21中、Bチーム合計22中で危なげなく予選を通過した。

イギリス（第1回大会2位）、イタリア（前回大会3位）などヨーロッパの強豪国が予選ラウンドで敗退する中、決勝トーナメント進出国には、ドイツ、フランスA・Bの他、台湾（前回大会2位）A・Bチームなどが名を連ねた。

心技体 人を育てる総合誌
月刊 武道

◆決勝トーナメント

決勝トーナメント1回戦の1試合目は日本Bとシンガポール Bが対戦。日本Bは予選の勢いに乗ることができず9中と失速したが、9―2で勝利。また、日本Aはオーストリア Aを11―8で下し2回戦へ駒を進めた。その他、ルーマニアがポーランドと対戦し、11―4と大差をつけて勝利した。強豪国としてA・B両チームが決勝トーナメントに進出したフランスは、BチームがシンガポールAを10―6で下し、予選の不調から調子を取り戻す。一方、フランスAチームはドイツと対戦し、ドイツが8―6の接戦を制し2回戦に進出した。

2回戦も接戦が続き、ルーマニアが8―7でフランスBを、ドイツが6―5でスイスをそれぞれ破った。日本Aは予選を通して今大会初の12射皆中を決め、台湾Aに勝利した。日本Bも台湾Bと対戦し、11―7で準決勝へ進出した。

大会の様子

各射場で激戦が繰り広げられた

◆準決勝

日本B　10―5　ルーマニア

決勝トーナメントでフランスを破り勢いに乗るルーマニアだったが、9射目まで終えたところで、4中と大きくつまずいてしまう。対する日本は、9射目までで7中し、最終1順で1射中(あ)てれば勝利が確定する場面。日本Bの10射目、大前・西田友樹選手が狙い澄まして放った矢は見事に的に中(あた)り、日本Bが決勝進出を決めた。

日本A　12―9　ドイツ

日本Aは軽快なリズムで次々と的中させ、後を追うドイツにプレッシャーをかける。ドイツも負けじと次々的中させ、9射目を終えた時点で的中数は9―6となる。日本Aの勝利がかかる10射目、大前・久野弥花選手が安定した射でしっかりと中てる。その後、日本Aは2回戦の勢いそのまま、決勝戦へ勝ち上がった。

3位＝ルーマニア

3位＝ドイツ

◆決勝

日本A　12―11　日本B

日本A、B両チームによる決勝となり、この時点で日本の団体3連覇が確定。日本選手がどのような試合を見せてくれるのかに、会場中の注目が集まる中、両チームとも失中することなく、10射目まで全員の皆中が続く。

手に汗握る勝負の命運を分けたのは11射目。先に日本Aの中・小越智就選手、落ち・木川寿眞選手が的中させ、日本Aが決勝トーナメント2回戦から3戦連続の皆中を決める。プレッシャーがかかる中、日本Bの中・久野研太選手が放った矢は、僅(わず)かに的の左上に逸れ、痛恨の失中。最後に日本Bの落ち・池下大翔選手が締めくくりの一本を的中させ、試合終了。日本Aが優勝を手にした。

日本勢同士の決勝が実現した（右が優勝したAチーム）

◉入賞チームコメント

優勝　日本A

久野弥花選手

「いつも通りの力が出せました。この結果に満足することなく、今後も高みを目指したいです」

小越智就選手

「世界大会という貴重な場に出場させていただいたことに感謝しつつ、国内の大会でのタイトル獲得を目指して、今後も精進していきたいと思います」

木川寿眞選手

「少し調子を崩していたのですが、最後はうまく引けました。プレッシャーをしっかり乗り越えられたことは今後の試合に臨む自信になると思っています」

久保田清監督

「日本代表で選ばれた選手たちですので、安心して見ていました。今回、代表選手にとっては大会までの期間が短かったにもかかわらず、本当にいいチームワークを発揮してくれました。第1回世界大会から日本代表チームに関わってきていますが、今回は過去一番のチームだと思います」

準優勝　日本B

西田友樹選手

「とても貴重な経験をさせていただくことができました。地元の奈良県に帰ったら、また国スポに向けて稽古に励んでいきたいです」

久野研太選手

「外してしまった回数が多かったことに悔いが残っていますが。今日の結果をしっかり受け止めてこれからの弓道人生に生かしたいです」

池下大翔選手

「この大会に向けて自分なりにベストを尽くして挑み、自分なりの弓道ができた気がします。次の世界大会を目指すとともに、徳島県の弓道の向上に努めていきたいです」

優勝＝日本A（左から、久保田監督、小阪飛星選手、木川選手、小越選手、久野〈弥〉選手）

準優勝＝日本B（左から、山口純マネージャー、廣實佳祐選手、池下選手、久野〈研〉選手、西田選手）

3位　ルーマニア
ララカ・パッチー選手

「3位という結果をとても光栄に思っています。今回の大会の開催にあたり、ご尽力いただいた全ての方に感謝いたします。

準決勝では日本チームに負けてしまいましたが、日本での世界大会で素晴らしい技術を持つ日本チームと試合でき、とても嬉しかったです。

これからも自分たちの稽古はもちろん、ルーマニア国内でも弓道を広めて、世界大会に出場できるレベルの選手を多く生み出せるようにしていきたいです」

3位＝ルーマニア（左から、Silvin Stuzu 選手、Traian Dascale 監督兼選手、Raluca Puchea 選手、Ovidiu Gyarmath 選手）

■国際弓道連盟主催 レセプションパーティー

パーティーの様子

高円宮妃久子殿下
国際弓道連盟名誉総裁

大会前日の2月28日には、名古屋市中区の名古屋東急ホテルで国際弓道連盟主催のレセプションパーティーが開催され、国際弓道連盟名誉総裁の高円宮妃久子殿下のご臨席のもと、国際弓道連盟役員、選手、関係者などが参加し、盛大に行われた。

加藤出国際弓道連盟会長の開会挨拶に続き、高円宮妃久子殿下がお言葉を述べられた。

「国際弓道連盟が設立されてから18年目になります。この18年の間に私どもは日本の伝統文化である弓道の普及振興に努めてまいりました。国際的に多くの方が弓道に理解を示してくださることに驚き、また大変ありがたく思っております。

大村秀章
愛知県知事

河村たかし
名古屋市長

新型コロナウイルス感染症により練習がままならない中、大会に出場される選手の皆様は大変苦労されたかと存じます。明日のご健闘を楽しみにしております。この大会を通して、皆様が改めて弓道の素晴らしさに着目してくださり、その弓道に深い理解を示してくださいますことを祈っております」

パーティーには大会開催地から大村秀章愛知県知事、河村たかし名古屋市長が出席し、大会の成功を祈念する挨拶を述べた。

その後、ジェローム・シュシャン国際弓道連盟理事による乾杯の発声で、全員で乾杯をした。会場では、国境を越えた弓道談義に花が咲いた。

高円宮妃殿下が会場をまわり、参加者たちと弓道談義を交わした

3位　ドイツ
クリス・ボーム選手
ナディーン・エマー選手
ギゼラ・ベカー選手

「とても楽しかったです。日本チームはとても強かったですが、私たちのベストは尽くせたと思います」

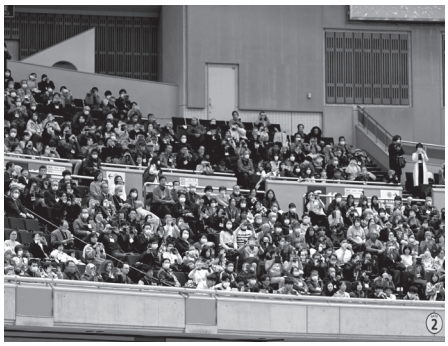
「日本チームの技術を見て、私たちではとても敵わないようにも感じましたが、私たちができる稽古をこれからも続けて技術を磨いていきたいです」

「今回のメンバーはみんな近い地域に住んでいて、よく一緒に稽古していました。4年後の世界大会にまた同じチームで出られるよう、今日の経験を生かして稽古を続けていきたいです」

3位＝ドイツ（左から、Sorin Jurma 監督、Gisala Becker 選手、Nadine Emmar 選手、Tobias Oswald 選手、Chris Boehme 選手）

試合後、互いの健闘を讃え合い礼を交わす場面が見られた
（写真は準決勝後のドイツと日本Aの選手）

■結果
優　勝＝日本A
準優勝＝日本B
3　位＝ルーマニア、ドイツ



平日にもかかわらず、会場には2000名以上の観客が選手の応援に駆けつけた

好評発売中！

筑波大学准教授
松尾牧則 著

弓道
その歴史と技法

弓矢の発生から日本の弓術発達、技法の発展を概観し、世界の弓術も紹介。現代弓道の課題や射法にも踏み込む。

四六判・上製・484頁・定価2,640円

ご注文・お問い合わせ
日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321　東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147　FAX 03-3216-5158
https://www.nipponbudokan.or.jp

日本武道学会弓道専門分科会

特別企画を開催

テーマは「弓道具としての『和弓』を通じた弓道文化の探求」

シンポジウム――――

――――弓製作実演

日本武道学会弓道専門分科会による特別企画のシンポジウム・弓製作実演が2月29日、愛知県名古屋市の日本ガイシフォーラムで開催された。

今回の特別企画は第4回世界弓道大会（主催：国際弓道連盟）に合わせて企画され、「弓道具としての『和弓』を通じた弓道文化の探求」と題し、2部構成で行われた。第1部は学術シンポジウムとして、弓道専門分科会代表の五賀友継氏（国際武道大学特任助教）と、同会会員の黒須憲氏（東北学院大学教授）による講演が日本語と英語で行われた。第2部は「和弓を体感しよう」をテーマに、横山黎明弓製作所の弓師・横山黎明氏と横山慶太郎氏により、弓打ち実演披露と弓製作過程の解説・質疑応答が行われた。第2部の途中では、世界弓道大会にご臨席されていた国際弓道連盟名誉総裁の高円宮妃久子殿下がご視察され、弓師の熟練の技をご見学された。

会場には国内外の弓道家が多数来場。講義や解説に熱心に耳を傾け、弓打ち実演ではメモや写真を取りながら真剣に見学し、積極的に質問するなど、弓道や和弓についての理解を深めていた。

シンポジウムの冒頭、大保木輝雄日本武道学会会長が挨拶に立ち、「弓は、弓の世界だけでなく武道の世界の根幹を成すもので、ものの見方や考え方、心身一体化していく弓の技法は、実は武道の本質を示しているのではないかと考えております。今回の特別企画には大いに期待しています」と述べた。

続いて、五賀弓道専門分科会代表が、「弓道という文化を理解する上では、和弓の使用方法を理解するのみならず、その歴史や文化的背景、さらには他文化の弓との比較における特徴や性格を理解しておくことは大切なことです。本日は、学術シンポジウムと弓師による弓打ち実演を通じて、和弓に関する知識を学術研究成果を交えて総合的に提供することで、弓道文化について理解を深めていただきたいと思います」と特別企画の趣旨説明を行った。

■第1部・シンポジウム

まず、五賀氏が「弓道研究の現状」と題して講演。弓道研究の位置付けや弓道に関する学術論文・研究発表の状況、人文科学・自然科学の各分

高円宮妃久子殿下が特別企画をご視察

熟練の弓師による「弓打ち」の技を熱心にご見学

高円宮妃久子殿下、弓師・横山黎明氏と横山慶太郎氏を囲んで、日本武道学会弓道専門分科会・国際弓道連盟関係者一同

野における近年の研究など、日本で弓道が学術的にどのように研究されているかについて紹介した。

続いて、黒須氏による「日本の弓の伝統とその性格―木弓長弓の理由―」の講演。豊富な資料と自身の実践・弓製作の経験を基に、和弓の歴史を紹介しながら、弓の特徴である「握りが中央でないこと」「木弓で長弓であること」「竹と複合弓であること」の3点について解説した。

■第2部・弓製作実演

宮崎県都城市の弓師・横山黎明氏が、弓の製作過程の一つ「弓打ち」を実演した。横山氏が手掛ける「都城大弓（みやこのじょうだいきゅう）」は、質実剛健、実践性に優れた薩摩弓の流れを汲（く）み、江戸時代初期には製法が確立したといわれており、現在、国の伝統的工芸品の指定を受けている。横山氏が弓に巻いた縄に100本近いクサビを木槌（きづち）で打ち込むことで、徐々に美しい半円状に反っていく様が披露された。

また、横山慶太郎氏が大弓の製作過程を紹介。素材の竹などを実際に触れてもらいながら、長い歳月と手間暇をかけ、一人の弓師が200以上の製造工程をすべて手仕事で仕上げているという解説に、詰めかけた弓道家たちは熱心に聞き入っていた。

◎**横山黎明氏**「我々は完成させた弓を渡しますが、弓を使うことで弓がさらに変わっていくのです。弓がより良いものとなるよう、こうした機会を通じて弓の扱い方をお伝えできることはとてもありがたいです」

◎**横山慶太郎氏**「地元では小学校で披露することはありますが、今回、海外の方にも知ってもらう機会をいただき、弓をもっと身近に感じていただけるよう、製造側から情報発信をしていきたいと思います」

◇　◇

終了後、弓道専門分科会代表の五賀氏に感想を伺った。

◎**五賀友継氏**「この特別企画を機に、弓道が学術的な研究の対象であるということを、国内外の弓道家に知っていただけたなら嬉（うれ）しいです。『弓道とは何か』など本質的なことについて、科学的な裏付けに基づく研究が進むことは、弓道のみならず武道全体の発展につながると考えます。この特別企画をそのきっかけの一つとして、現場の弓道家の方々が捉えていただけたなら幸いです」

第2回全日本空手道団体形選手権大会（決勝戦）

男子

群馬県（前年度優勝・関東地区）が堂々の2連覇

男子団体形・優勝＝群馬県（上・形、下・分解）

女子

駒澤大学（学連）が接戦を制し初優勝

女子団体形・優勝＝駒澤大学（上・形、下・分解）

第2回全日本空手道団体形選手権大会・決勝戦が2月24日、東京アメリカンクラブ（東京都港区）で開催された。全国各地区の協議会ならびに競技団体から選出された代表チームが、1月20・22日に日本空手道会館（東京都江東区）で予選ラウンドを行い、決勝に勝ち上がった男女各2チームが団体形日本一を争い演武を披露した。

男子団体形は前年度優勝の群馬県と駒澤大学が対戦し、群馬県が優勝し2連覇を成し遂げた。女子団体形は駒澤大学と国士舘大学（学連）の大学生チーム同士が対戦し、駒澤大学が初優勝に輝いた。

大会では、3名の選手が制限時間5分の中で「形」と「分解」の演武を行い、7名の審判員が10点満点で採点。最高点と最低点を除いた5名の合計点（50点満点）によって優勝チームを決定した。両チーム同点の場合は、得点のもとになった5名の審判員の点数のうち最低点が高い方を勝利とした。

大会中、会場に訪れた観客にはコース料理が振る舞われ、観客は食事とともに日本最高峰の形を味わった。

■男子

○群馬県　46・30点

駒澤大学　44・30点

両チームとも松濤館流の形「ゴジュウシホショウ」を披露。

先に演武する群馬県（梅山晟也、梅山竣也、本島照英）は、前年度優勝のメンバーが出場した。群馬県チームは社会人と学生の混合チームであり、練習を共にする機会が少ないにもかかわらず、一糸乱れぬ呼吸の合った形を演武した。

続いて駒澤大学（髙橋飛羽、須永理紀、木村吹輝）が演武。学生のパワーとスピードが冴える鋭い形が披露された。

結果は、群馬県が2点差をつける大勝で優勝し、圧倒的な実力で2連覇を勝ち取った。

○審判コメント

齊藤一雄審判員

「群馬県は気魂あふれる素晴らしい形でした。両チームとも世界に羽ばたく優れた形をこれからも披露してくれることを期待しています」

渡邉純一審判員

「両チームとも日本を代表する団体形を披露してくれました。勝敗を分けた一番大きなポイントとしては、分解における『タイミングと間合い』という評価基準において、駒澤大学よりも群馬県が、より実践的なタイミングや間合いで形を演武していたと思います」

男子団体形・2位＝駒澤大学

■優勝＝群馬県

梅山晟也選手（中央左）

「挑戦者の気持ちで大会に挑み、優勝することができました」

梅山竣也選手（左端）

「今日優勝できたのは頑張ってくれたチームのおかげです」

本島照英選手（中央右）

「先輩方と一緒に大会を連覇することができて嬉しいです」

山口南緒選手（右端）

「チームの一員として優勝に貢献できたことを嬉しく思います」

■女子

○駒澤大学　44・80点
　国士舘大学　44・80点

前年度優勝の大阪学芸高校（近畿地区）が予選ラウンドで姿を消す。決勝に勝ち上がったのは駒澤大学と国士舘大学で大学生チーム同士の決勝となった。

初めに駒澤大学（泉優里花、稲璃岬、志村珠妃）が「ゴジュウシホショウ」を演武し、松濤館流の特徴である力強さを存分に発揮した形と分解を披露した。次に国士舘大学（堀場早耶、吉本弥可、柏木菜那）が糸東流の「トマリバッサイ」を演武。動きが綺麗に揃った形と、気迫あふれる分解が披露された。

日本最高峰の女子団体形決勝は、両チーム44・80点の同点となった。そこで、得点になった審判員5名の得点の最低点を比べると、駒澤大学が8・8点、国士舘大学が8・6点であった。わずか0・2点の差を制し、駒澤大学が初優勝。結果発表後、泉選手は目に喜びの涙を浮かべていた。

審判コメント

山田健剛審判員

「駒澤大学の形はダイナミックさや力強さがあり、技を受けて倒れた後の立ち上がりがスムーズで、見応えのある演武でした。国士舘大学も糸東流のスピード感あふれる演武で素晴らしかったのですが、分解の技を出し終えた後の体の強さがあるとよいと思います」

大手信子審判員

「駒澤大学は下半身が安定し、そこから繰り出される上半身の連動した動き、技の数々が素晴らしかったです。国士舘大学はスピードや細かい角度を見事に揃え、一つ一つの稽古の積み重ねが技に表れていました」

心技体 人を育てる総合誌
月刊 武道

ゲストで喜友名諒氏が演武

大会のアトラクションとして、東京２０２０オリンピック金メダリスト、世界空手道選手権大会個人形４連覇、団体形２連覇などの戦績を持つ喜友名諒氏がゲストとして登場し、個人形の演武を披露した。

喜友名氏は、自身が所属する劉衛流に伝わる形「オーハン」を披露。演武を間近で見る観客らは、空手道界のレジェンドの気迫と技術に心酔した。演武後の挨拶で喜友名氏は「今日のこの会場は、選手と観客がとても近く、選手たちもとても緊張したと思いますが、稽古を重ねてきたことが分かるとても素晴らしい形を見せていただきました。今日演武していただいた選手たちが、今後の日本の団体形を代表する方になっていくことを願っています」と選手たちを労い、今後の日本の空手道団体形の発展を祈念した。

演武を披露する喜友名諒氏

好評発売中！

空手道 その歴史と技法

小山（こやま） 正辰（まさし） 和田（わだ） 光二（こうじ） 嘉手苅（かでかる） 徹（とおる） 著

空手は沖縄で発祥し、日本本土に伝承され、世界のKARATEとなった。その歴史と技法を、共同執筆で紐解く。空手の真髄に迫る白眉の一冊。

四六判・上製・568頁・定価2,640円

◎ ご注文・お問い合わせ ◎

（公財）日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158
https://www.nipponbudokan.or.jp

女子団体形・２位＝国士舘大学

■優勝＝駒澤大学

稲璃岬選手（右）

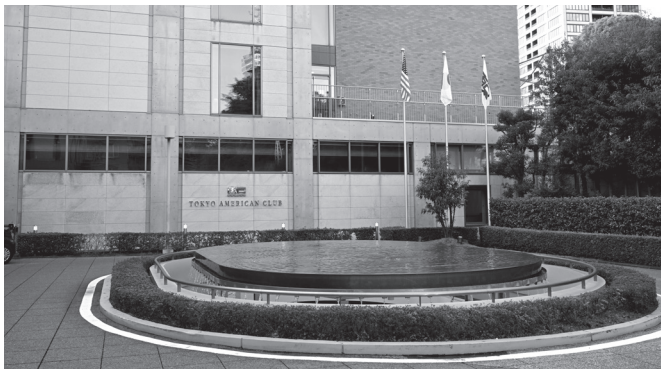
「ディナーショーの試合形式は初めてでしたが、とても新鮮な気持ちで試合を楽しむことができました」

志村珠妃選手（左）

「最初は会場の雰囲気に圧倒されて緊張してしまいましたが、とてもいい経験になりました」

泉優里花選手（中央）

「団体形は空手道の競技の中でもマイナーかもしれませんが、個人形とは違った楽しさがあるので、今回私たちの演武を見て、団体形に興味を持ってくれたら嬉しいです」



会場となった東京アメリカンクラブ

第23回全日本短剣道大会

団体女子の部決勝・中堅戦＝上田（福岡桜組・右）が胴を決める

女子団体　福岡桜組が強豪・郡山Aに勝利

全日本短剣道大会が2月11日、日本武道館で開催された。

大会は団体戦として、女子の部、成年の部、高校生の部が、個人戦として、女子の部、成年の部（A、B、Cの3部）、高校生の部が行われ、団体戦・女子の部では、福岡桜組（福岡）が昨年優勝の郡山A（福島）を破り、初優勝に輝いた。

■団体戦（3人制）

▼女子の部（13団体）

決勝は、福岡桜組と郡山Aの対戦。先鋒戦、福岡桜・宿利佳美が相手の反則によって勝利。続く中堅戦で福岡桜・上田碧が立て続けに胴を2本決め、福岡桜の優勝が決まった。大将戦は、郡山A・山口あや子が2本勝ちで一矢報いた。試合後、選手たちはすぐさま形の稽古を行っていた。

◉優勝＝福岡桜組・上田靖仁監督

「苦節十年、やっと結果が出ました。実力はまだまだ足りませんのでさらに精進していきたいです。決勝は絶対チャンピオンの山口選手率いる郡山でしたが、選手たちが頑張ってくれたと思います。うちは自衛官と一般人の混成チームですので、時間を上手（うま）く調整しながら、少ない時間の中、一生懸命に練習してきました。選手たちの努力の賜物（たまもの）だと思います。（優勝後の形稽古は）『礼に始まり、礼に終わる』と一緒で、うちの道場訓のようなものです。道場に感謝するという意味もあります。試合終了後に必ず行っています」

▼成年の部（77団体）

勝ち上がったのは、普通科教導連隊A（静岡）と本間道場（神奈川）。

先鋒戦で普教連A・西村健が胴を2本決めて勝利。中堅戦も普教連A・吉村佳祐が2本勝ちを果たして、普教連Aが優勝した。

◉優勝＝普通科教導連隊A・山田晃裕監督

「これまで、決勝までは進出するのですがそこから勝つことができませんでした。やっと勝つことができ、本当に嬉（うれ）しいです。本間道場さんも強豪ですのでどちらが勝ってもおかしくはなかったですが、攻める気持ちを持って戦えと選手たちに伝えました。前2人が決めてくれてよかったです」

団体成年

普教連A（静岡）が悲願の初優勝を飾る

団体成年の部決勝・先鋒戦＝西村（普教連A・右）が胴で先取する

▼高校生の部（10団体）

決勝はリーグ戦で行われ、勝田工業高校（茨城）のA、B、Cによる同門対決となり、勝数2で勝田工業高Aが優勝した。

■個人戦

▼女子の部（49名）

決勝は山口あや子（郡山）と鈴木弥生（本間道場）。山口があっという間に2本を決め、6度目の優勝を飾った。

◉優勝＝山口あや子（郡山）

「後輩たちに優勝した姿を見せられました。練習してきてよかったなと思います。決勝の対戦相手の鈴木選手は、知っている仲ですので胸を借りる気持ちで臨みました。今後は後輩育成に力を入れたいと思います」

▼成年の部A（35歳以下／154名）

決勝は19回大会優勝で昨年3位の関澤良太（第18普通科連隊）と鎌倉卓摩（普通科教導連隊）が対戦。関澤が胴を2本決めて優勝を飾った。

◉優勝＝関澤良太（第18普通科連隊）

「去年連覇を逃しましたので、今回優勝できて嬉しいです。決勝では、絶対優勝するぞという気持ちで臨みました」

▼成年の部B（36歳以上50歳以下／55名）

決勝は、長谷川英昭（茨城県選抜）と佐藤岳（普通科教導連隊）が対戦。長谷川が2―0で優勝した。

▼成年の部C（51歳以上／22名）

決勝は、鈴木利広（栃木県選抜）と勝屋弘善（佐賀県選抜）が対戦。鈴木が1―0で優勝を飾った。

▼高校生の部（31名）

決勝は及川瑛士（勝田工業高）と古賀奏丞（佐賀農業高）。及川が2―0で優勝を果たした。

大会結果

■団体戦

▼女子の部＝①福岡桜組（福岡）②郡山A（福島）③第21普通科連隊（秋田）、栃木県女子選抜（栃木）

▼成年の部＝①普通科教導連隊A（静岡）②本間道場（神奈川）③第18普通科連隊A（北海道）、第50普通科連隊C（高知）

▼高校生の部＝①勝田工業高校A（茨城）②勝田工業高校B（茨城）③勝田工業高校C（茨城）、佐賀農業高校A（佐賀）

■個人戦

▼女子の部＝①山口あや子（郡山）②鈴木弥生（本間道場）③円谷美晴（郡山）、小川愛美（博真館）

▼成年の部A＝①関澤良太（第18普通科連隊）②鎌倉卓摩（普通科教導連隊）③石井稜介（第50普通科連隊）、八木達矢（第50普通科連隊）

▼成年の部B＝①長谷川英昭（茨城県選抜）②佐藤岳（普通科教導連隊）③西村健（普通科教導連隊）、上村直也（第50普通科連隊）

▼成年の部C＝①鈴木利広（栃木県選抜）②勝屋弘善（佐賀県選抜）③船城明（徳島県選抜）、菅井和宏（須賀川市銃剣道スポーツ少年団）

▼高校生の部＝①及川瑛士（勝田工業高）②古賀奏丞（佐賀農業高）③渕上誠太（佐賀農業高）、橋本大熙（博真館）